

1. 装置の電源を入れる前に、液体窒素を注入する。
※液体窒素を注入せずに装置の電源を入れると受光素子が壊れます。
※液体窒素の保持能力は約8時間です。この時間を超える場合は追加注入してください。
※高温測定する際は、循環水冷却ユニットの起動、ガス通気が必要です。
※室温～100℃弱の範囲は温度調整は困難です。 ex. 50℃（1時間半位で安定する）
2. 装置とレーザー、パソコンの電源を入れ、LFAソフトを立ち上げる。
※測定までには、15分程のウォームアップが必要です。
3. 測定サイズに加工したサンプルの大きさと厚み、質量を測定し、黒化処理を行う。※refも黒化処理必要。
4. 炉を開けて、左にref、右にサンプルを設置し、形状にあった試料押えを置く。
5. 「ファイル」の「新規」をクリックし、「 α 、 C_p 、 λ 」同時測定モードを選択し、サンプル条件、ref条件を入力する。※試料の直径（辺長）と厚みは小数点3桁まで、質量は小数点4桁まで記入する。
6. 「測定」の「試料測定」をクリックし、測定条件を記入し、測定を開始する。
※入力レンジを振り切ったものは、保存されない。通常のサンプル0-500 mV。
※測定条件が合わない場合、サンプリングレートやレーザーパワーのメモリ調整を行う。
それでも調整できない場合、パルス幅を切り替える。パルス幅切り替え時は一度目盛りを0にすること。
熱拡散率が大きくかつ薄い試料の場合に、パルス幅を300 μm に切り替える。
7. 「保存」をクリックし、保存名を設定し、データを保存する。※一覧には100データしか表示されない
ので、個人個人別にファイルを管理しておく。
8. 「試料測定の結果」において結果の確認、「CFPの起動」においてデータの精度を確認する。
9. レーザーの電源をOFFし、炉を開けサンプルを取り出す。再度炉を閉じて、ソフト、パソコン、装置の電源をOFFにする。

※取り扱いの詳細は手順書を参照すること。不明な点はすぐに担当まで連絡すること。